Copyright George Cockle

On The Board / マリン企画

Tom Curren

　今年の夏、トム・カレンが新しいアルバム「In Plain View」のプロモーションのために来日していた。彼はサーフィンの世界チャンピオンに３回輝いたことのある、いわずと知れたスーパースターだ。彼とは湘南でのライブで知り合い、ラジオ番組のためにインタビューもさせてもらった。最初はもの静かだったが、何回か会ううちに印象は変わった。シャイだが、ユーモアのセンスもあるし、予想外に明るい性格だった（笑い）。

　実は俺のところにトム・カレンの新しいアルバムが届いたとき、あまり期待はしていなかった。というのも、ジャック・ジョンソンが2001年にデビューアルバムをリリースして以来、ジャックに続けとばかりに、いくつものレコード会社がサーファー達のアルバムをリリースしていたが、その多くは駄作だった。もちろん、ドノヴァン・フランケンレイターやトリスタン・プリティマン、なかでもコルビー・キャレーのアルバムはいい仕上がりだった。レコード会社は彼女をこのサーファーロックブームに乗せるため、サーファーのイメージにしてプローションしていた。親がカウアイ島に家を持っていたので、そのイメージを作りやすかったのだと、彼女は俺のインタビューに答えたこともあった。

　そんな流れがあり、サーフロックのアルバムにはあまり期待していなかったんだ。ところが、トム・カレンのアルバムはいい意味でオレを裏切ってくれた。曲もよくできていて、プレイヤー達の演奏もすばらしい。彼が波の上、いや海の上でたくさんの時間を過ごしたことが、このアルバムから感じ取れる。世界中のさまざまな海に入り、そこでトムが感じたこと、思ったことを表現している。まるで海の上から生まれた音楽だ。実際に波に乗っている時間は、ほんのわずかで、海に浮かんでいるほうが長い。そんな時は、さまざまなこと、思いが頭をよぎる。失望、悲しみ、昔の彼女、友達。スーパースターのトムも、大人になって行く間にいろいろあったのだろう。彼はもう50代だ。サーフィンのことを歌っているのは、ただ一曲、「Gerry」だけだ。この曲は若い頃、うねりが入ったときに、ポイントまで連れてってくれた人の歌だ。それなのに、全編で海を連想させるアルバムなんだ。

　今回のトム・カレンの滞在中に、ちょうどカリフォルニアのロックバンド、パブロ・クルーズがブルーノートでライブをやっていた。トムがオレのラジオ番組に出てくれたのをきっかけに、パブロのライブに足を運んだ。観客にトム・カレンが来ていると聞いたパブロ・クルーズは、トムにスポットを当てた。バンドのギターリストでサーファーでもあるデイブ・ジェンキンズは、トムの大ファンだった。トムも、もちろんパブロ・クルーズの大ファンだった。あの「フリー・ライド」の名曲「Zero To Sixty In Five」を始めた瞬間、トムは大きな叫び声を出してしまったほどだ。コンサートの後はトムとパブロ・クルーズのメンバー達が楽屋で盛り上がっていた。一緒に音楽をやろうなんて

Copyright George Cockle

話でね。それが実現したら、すごい話だ。 そうしたらまた、オレのラジオ番組に出てもらおう。ついでにライブの司会もやらせてもらおうかな、なんて企てている俺であった（笑い）。